【著作権について】
・著作権はすべて作者である梅井ゆえに帰属します。
・ダウンロードした作品は無料で閲覧いただけます。
・非公開で突破的に使用される場合のみ、連絡不要かつ無料でお使いいただけます。
・右記以外で本作を使用されたい場合は、使用料の有無にかかわらず梅井ゆえまでご連絡ください。（Mail:umeiyue54@gmail.com）
・使用方法・料金等の詳細は、梅井ゆえウェブサイト（https://script.umeiyue.website）のガイドラインをご覧ください。

# 「ちゅうぶらりん」

梅井ゆえ

【登場人物】

・マーリエ・・・十四歳（くらい）。一人っ子。基本的に物静かだが、負けん気が強い。周りの同年代の人たちを見下している。

・サーシャ・・・二十二歳（くらい）。風変りで浮世離れしたカラクリ人形作家。一人で暮らしている。一人称は「自分」。

・ソフィ・・・マーリエの母親。

・人形達・・・四人（い・ろ・は・に）。サーシャの作ったもの。家の中に散らばって置かれている。部屋のカラクリ装置の一部であり、装置を稼働させると人形達も動く。また、サーシャの意識では、彼らはみんな生きている。

時代も場所も不明確である。だが、どこか懐かしみのある雰囲気。
客席には、観客と人形が交互に座っている。
ガラクタで溢れかえった小汚い部屋。
舞台中央に机と椅子が一対。椅子は、玄関に一番近い位置に置いてある。
奥の壁には棚（コロコロ装置のようなもの）が備え付けてあり、
大きな布で覆われている。上手に玄関。下手にも他に部屋がある。

【一】一人っきりのサーシャ

サーシャが、自分の作った人形達と遊んでいる。

サーシャ「いち、いち、いちにいさん、はい！」

人形達「♪カエルの歌が、聞こえてくるよ～」
一同「♪グワ、グワ、グワ、グワ、ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ～」

輪唱になる。

人形い「♪カエルの歌が～、聞こえてくるよ～、グワ、グワ、グワ、グワ、ケロケロケロケロ、
クワ、クワ、クワ～、ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ、クワ～」
人形ろ「♪聞こえてくるよ～、グワ、グワ、グワ、グワ、ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ
～、カエルの歌が～、ケロケロケロ、クワ、クワ、クワ～」
人形は「♪グワ、グワ、グワ、グワ、ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ～、カエルの歌が～、
聞こえてくるよ～、ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ～」
人形に「♪ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ～、カエルの歌が～、聞こえてくるよ～、グワ、
グワ、グワ、グワ、ケロケロケロケロ、クワ、クワ、クワ～」
サーシャ「♪カエルの歌が～、聞こえてくるよ～、カエルの歌が～、聞こえてくるよ～ケロケロ
ケロケロ、クワ、クワ、クワ～」

最後にサーシャだけで。

サーシャ「♪カエルの歌が～」

間。

サーシャ「うーん。」
人形は「どうしたんだい、サーシャ。」
人形い「何かが可笑しいんだ。」
サーシャ「何かが腑に落ちないんだよ。」
人形に「何かって？」

人形ろ「何かさ」
サーシャ「……カエル。」
人形達「カエル！」
人形い「ゲロゲロ」
人形ろ「グワグワ」
人形は「コロコロ」
人形に「グエグエ」
人形い「井の中の蛙」
人形ろ「蛇に睨まれた蛙」
人形は「竜と心得た蛙子」
人形に「カエルの子はカエル」
サーシャ「カエルの子」
人形達「オタマジャクシはカエルの子」
サーシャ「カエルの子……オタマジャクシ！」

ソフィ（声）「サーシャ！！！」

ソフィの声とともに人形達は無機物と化す。

ソフィ「サーシャ！じゃあ、よろしくね！」
サーシャ「はいよー。そんな大きな声で怒鳴らないでよ。耳がキンキンする。」

サーシャと人形達、悪だくみして、互いに目配せする。
サーシャは、玄関のあたりに身を潜める。

【二】マーリエの来訪

マーリエ、ソフィを無言で見送り、ひと呼吸してから家の中に入る。

マーリエ「お邪魔します。……うわー……え、人形？」
サーシャ「わっ！」
マーリエ「っわあああ！」
サーシャ「あはははははは！元気だね！」
マーリエ「……な、何なんですか。」
サーシャ「んふふ、まあまあそんな怒んないでよ。そこ座って。あんたがソフィの娘ちゃんだね。名前は？」

マーリエ、椅子に座る。
サーシャ、会話しながら、散らばった人形を隅の方へ片づけ、
そして、飲み物や自分の椅子を運んでくる。

サーシャが下手に行く度に、物が落ちたり壊れたりする音が聞こえる。

マーリエ「『マーリエ』です。」
サーシャ「『マーリエ』か……。『マーリエ』、『マーリエ』、『マーリエ』……うん。いい名前だ、気にいった。」
マーリエ「……気に入るも何も、それが私の名前です。」
サーシャ「？……はははは、そりゃそうだな。君の言う通りだ。ソフィも、あんな堅物なのに、綺麗な名前つけるもんだなと思って。」
マーリエ「私は名乗りました。次は、あなたの番です。」
サーシャ「自分は『サーシャ』。ソフィの従姉妹だよ。」
マーリエ「(言いにくそうに) サーシャ、さん。」
サーシャ「『サーシャ』でいいよ。何だい、そのもの言いたげな目は？」
マーリエ「本当に親戚なんですか？あなたが？」
サーシャ「まあね。」
マーリエ「だって、見たことありません。叔母さんの結婚式にも、ひいおばあちゃんの葬式にだって、来てなかった。」
サーシャ「それは……そういう人が多いとこが嫌いなんだよ。それに、この山を下りるのも大変だろ？」
マーリエ「そうでもないと思いますけど。」
サーシャ「まあ長く生きてたらいろいろあるんだよ。」
マーリエ「そんなに年は変わらないと思うけど。」
サーシャ「ははは。ま、楽にしてよ。どうせ迎えが来るまで、ここに二人っきりだ。あ、あと、その『ます』とか『です』とかって言うのもやめてよ。名前の後の『さん』もいらない。『そんなに年は変わらないと思う』んならさ。」
マーリエ「サーシャさ……サーシャは、いくつなん……なの？」
サーシャ「トップシークレット。」
マーリエ「……。」
サーシャ「別に、年を重ねるほど、偉くなるわけじゃないだろう？楽にして。」

【三】二人っきり

サーシャ、最後にお菓子を取り出してくる。
そして、マーリエの対角線上に座って、微笑みながら無言でマーリエを凝視する。

マーリエ「……な、なんですか。」
サーシャ「何をするんだろうなと思って。」
マーリエ「何もないなら、こっち見ないで。」

マーリエ、自分の鞄から本を取り出し、読み始める。

サーシャ「ね、カエルとオタマジャクシ、どっちが好き？」
マーリエ「……どっちも嫌い。」
サーシャ「なんで？」
マーリエ「気持ち悪い。」
サーシャ「（笑って）あえて言うなら？」
マーリエ「……オタマジャクシ。」
サーシャ「どうして？」
マーリエ「……飛んでこないから。」

サーシャ、上機嫌に笑う。

マーリエ「……。」
サーシャ「……。ねえ、それ、なんて本？」
マーリエ「……ん。」

マーリエ、サーシャに本の背表紙を見せつける。

サーシャ「難しそうな名前。どんな本？」
マーリエ「……まだ読み始めたばっかり。」
サーシャ「そっか。本読むの好きなの？面白い？」
マーリエ「……たいていはそんなに。」
サーシャ「じゃあどうして？」
マーリエ「……他の事やるよりはまし。」
サーシャ「（笑って）何それ。おかしい理由。」

マーリエ、いきなり顔を上げる。

マーリエ「しつこい人を追い払うため。」

マーリエ、またすぐに本に集中する。

サーシャ「おお、こわ。……ソフィも本が好きだったよ。家にも本がいっぱいあるだろ。自分が思うにマーリエが持っているその本も家の本棚にあった物だろう。いかにもソフィが好きそうだ。マーリエは、ソフィにそっくりだね。」

マーリエ、本をテーブルに叩きつける。

マーリエ「あの人と一緒にしないでほしいんだけど。」

マーリエ、本を鞄にしまう。

サーシャ「読書は終わりかい？もう？」
マーリエ「気分じゃなくなった。」
サーシャ「なるほど、気分、ね？ははは。」
マーリエ「笑わないで。サーシャのせい。」
サーシャ「なんだい、そんなにソフィのことが嫌いかい？」
マーリエ「……。」

間。

サーシャ「んー……悪かった。悪かったよ。でもさ、せっかく二人なんだからさ、話をしようよ。」
マーリエ「話って……。」
サーシャ「本当に、ここに人が来るなんて、滅多にないからさ。久々に人と喋れて嬉しいんだよ。」
マーリエ「ついさっき人が多いところが嫌いって言ってたけど、人は嫌いじゃないの？」
サーシャ「うーん、たくさん人がいるところとさ、こうやって一対一で話すのとは、全然違うよ。
それにさ、マーリエは違うよ。他の大人たちとは違う。」
マーリエ「サーシャは、大人？」
サーシャ「それはどうかな？」
マーリエ「はぁ……。」
サーシャ「せっかく二人なんだし、何かして遊ぼうよ。」
マーリエ「ボードゲームは？」
サーシャ「（意気揚々とした調子で）道具がないから、一緒に作るところから始めなくちゃならないけど、何がしたい？自分、手先が器用だから、何でも作れるよ。」
マーリエ「待って……嫌なんだけど。」
サーシャ「えー。じゃあ何か他の案は？」
マーリエ「人と遊ばないから、遊びとか知らない。」
サーシャ「じゃあ、『あっち向いてホイ』をしよう？」
マーリエ「え。」
サーシャ「知らない？」
マーリエ「知ってるけど。」
サーシャ「ならさ」
マーリエ「子供っぽい。」
サーシャ「まあまあ、他にやること無いんだし。五回勝負ね。」
マーリエ「え、多い。」
サーシャ「最初はグー、じゃんけんホイ。あっち向いてホイ。」

五回「あっち向いてホイ」をする。
サーシャは、勝てば力一杯喜び、負ければ滅茶苦茶に悔しがる。
マーリエは、勝っても負けても、あまり感情を表に出さない。

マーリエ「子供っぽい。……。もう気が済んだでしょ。」
サーシャ「子供っぽい、ね……。」
マーリエ「はあ。本を読むから、邪魔しないでください。」
サーシャ「んーわかったよ……。」

マーリエ、椅子に腰かけ、黙々と読書を始める。
サーシャは、大人しく、人形を構ったり掃除したり、一人で作業をする。
本をめくる音。時計の音。

【四】雷鳴
マーリエ、ふと顔を上げる。
マーリエ「ねぇ……。」

サーシャはいじけている。

マーリエ「ねぇってば。」
サーシャ「……なぁに？」
マーリエ「……お手洗いはどこ？」
サーシャ「トイレだったらこの部屋の隣だよ。ほら。玄関の横に廊下がある。……でしょ。」
マーリエ「ありがと。」

マーリエ、トイレの方へ向かう。
サーシャ、悪戯を企み、椅子からこっそり立ち上がろうとする。
マーリエ、サーシャの企みに気付き、振り向く。

マーリエ「私の物に、絶対に触らないで！」
サーシャ「わかったよ。」

サーシャ、大人しく自分の椅子に座る。
マーリエ、退場。トイレのドアを閉める音。
サーシャ、意気揚々と椅子から立ち上がる。
人形達も動き出す。
そして、どこからともなくブービークッションを取り出し、
マーリエの座っていた椅子に設置する。

トイレの水を流す音。
サーシャと人形達、居住まいを正す。
マーリエが戻ってくる。

「ブーーーーー！」と、ブーブークッションの音が鳴り響く。

サーシャと人形達「あはははははは！」
マーリエ「……。」

マーリエの怒りが最高潮に。

マーリエ「……なにこれ。」
サーシャ「ふふふ……ブーブークッション。」
マーリエ「そうじゃない。……私の物に触らないでって言ったんだけど。」
サーシャ「触ってないよ、マーリエのバッグにも、ソフィの本にも。」
マーリエ「じゃあこれは何。」
サーシャ「ブーブークッション。」
マーリエ「だからそうじゃなくて、なんで私の椅子にこれが置いてあるの！」
サーシャ「だって、それは自分の椅子だから。今日はマーリエが使っているけれど、その椅子の持ち主は自分だよ。」
マーリエ「屁理屈。」
サーシャ「賢いとも言う。」
マーリエ「揚げ足取り。」
サーシャ「視野が広い。」
マーリエ「身勝手。」
サーシャ「自由なことはいいことだ。」
マーリエ「空気的にわかるでしょ。」
サーシャ「空気は読めても、必ずしもその流れに従うとは限らない。」
マーリエ「へそ曲がり。子どもっぽい。」
サーシャ「子供ねえ……。」
マーリエ「サーシャは大人なんかじゃない。年増な子ども。」
サーシャ「……。」
マーリエ「人の気持ちとか考えずに、好き放題して。本当迷惑。」
サーシャ「……。」
マーリエ「子どもに『子ども』って言われて悔しくないの。」
サーシャ「子どもで、何が悪いんだい？」
マーリエ「え？」
サーシャ「マーリエが思う子どもってどんなだい？マーリエは子どもなのかい？」
マーリエ「え、えっと……。」
サーシャ「じゃあ、逆に聞こう。マーリエにとって、『大人とは』どういったものだい？マーリエはさ、『大人』って何だと思う。」
マーリエ「え？」
サーシャ「どんな人が『大人だ』って言えると思う？」

【五】カラクリの館

サーシャ、おもむろに奥の壁際に行き、壁を覆う布を引き剝がす。
カラクリ装置と人形達が現れる。

サーシャ「自分はね、この家で、一人っきりで生活している。毎日毎日、一人で、人形を作り続けている。そして、その自分の子どもみたいに可愛い人形達を売って、生きている。ここは、誰も寄り付かない森だからね、ずっと一人っきりさ。最近、ちょっと面白いことを思いついてね。人形作りにも慣れてきたから。家を作ろうと思ったわけさ。勿論、そこらの家じゃない。カラクリ仕掛けの家さ。」

サーシャ、装置を稼働させる。
歯車の噛み合う音とモーター音が響き渡る。
同時に、不穏な音楽。

マーリエ「え！え？大丈夫なの？」
サーシャ「大丈夫大丈夫。自分かここに居るのが証拠さ。」

サーシャ、椅子に座る。
マーリエは、落ち着かない。

サーシャ「さぁ、話の続きをしよう。」

天井から少し埃が降ってくる。

マーリエ「え？大丈夫なの？」
サーシャ「で、マーリエが思う『大人』ってどんな人。」

マーリエ、渋々口を開く。

マーリエ「まず、十八歳以上。」
サーシャ「それは、選挙に行く年齢だ。」
マーリエ「じゃあ、二十歳。」
サーシャ「それは、法律で決められたものであって、マーリエの考えた答えではないよね。」
マーリエ「……。体が大きい人。」
サーシャ「年を重ねても体が小さいままの人もいるし、幼くても大きい人もいるよ。」
マーリエ「……。」

間。

マーリエ「ぇ……ちゃんと仕事してて、周りに迷惑をかけてなくて……」
サーシャ「ちゃんと仕事してるってどういうこと？」
マーリエ「毎日仕事をする。」
サーシャ「じゃあ、迷惑をかけないってどういうこと？」
マーリエ「誰の助けも求めずに、一人で生きていけること。」
サーシャ「誰の助けも？」
マーリエ「うん。」
サーシャ「そんな人間がこの世界にいると思う？」
マーリエ「……。」

時折、天井や舞台奥の装置から大きな音が聞こえてくる。
さらに人形達も怪しく動く、マーリエの行く手を阻む。
マーリエは、恐怖し叫ぶ。

サーシャ、笑っている。

だんだんカラクリ装置の音が大きくなっていく。

マーリエ「何笑ってるの！」
サーシャ「マーリエのお母さんは？」
マーリエ「え？」
サーシャ「マーリエのお母さん、ソフィは『大人』かい？」
マーリエ「……。」

間。カラクリの音も一瞬止まる。

マーリエ「わからない！」

次の瞬間、天井から、埃とともに紐に夥しい数の吊るされた人形が降ってくる。
マーリエ、悲鳴を上げて身を守ろうとする。
サーシャだけが平然と立ち、静かに笑っている。

サーシャ「自分はね、ちゅうぶらりんだと思うんだ。」
マーリエ「……。」

人形達、眉間を糸で吊るされるように、ゆっくりと立ち上がっていく。

サーシャ「『大人』も、『子ども』も、端っからないんだと思う。じゃあ、みんなの言う『大人』や『子ども』って言うのものは、いったい何だい、だって？そりゃあ、自身の思う『理想の人間』と『その理想に届かない自分』が在るだけさ。理想的な人間を『大人』と言

い、そうでなければ『子ども』と言う。誰一人として、『大人』にはなれない。なんて言ったって『大人』は『理想』だからね。今の自分より、より完璧な自分が『大人』なんだ。」

人形い「わたしは大人だ！」

サーシャ「そうだなぁ、あえて言うとするなら、この吊るされた人形の状態が『大人』かな？」

人形ろ「大人ってなんだ？」

人形は「理想的な人間になりたい！」

人形に「もっと大人になりたい。」

人形達「もっとなりたい自分に近づきたい！」

サーシャ「この糸の上、ずっと上に自分の思う大人がいるんだ。ああなりたい、こうなりたい、って思いが糸になる。自身の努力次第でこの糸は、短くなることも、長くなることもあるだろう。」

サーシャ、おもむろに鋏を手にする。

サーシャ「でも、きっと一番上に届くことはない。人間は、貪欲だからね。たとえ糸を短くできても、またすぐに自分でその糸を長くしてしまう。ずっとちゅうぶらりんなんだ。」

サーシャ、人形を吊るす糸の一本を、鋏で切る。鋏の音。人形の落ちた音。

人形い「ワタシは、大人だ。」

人形ろ「オレは、大人だ。」

人形は「アタシは、大人だ。」

人形に「ボクは、大人だ。」

人形達、口々に述べたそばから、糸が切れたように倒れていく。

サーシャ「自分は大人というやつは、大人じゃない。そんなの理想のない、欲望のない、冷え切った傀儡だよ。」

サーシャ、落ちた人形を拾い上げる。

サーシャ「痛かったね。一度、切れてしまっても大丈夫。また、結び直せばいいだけさ。」

サーシャ、切った糸を結び直す。

それと同時に、人形達もまた立ち上がっていく。

【六】カエルとオタマジャクシ

サーシャ「さ、マーリエ、椅子に座りなよ。もうこれ以上落ちてくるものは、ないからさ。」

マーリエ、ゆっくりと椅子に座る。
人形達が揺れている。

サーシャ「マーリエはさ、マーリエ自身を子どもだと思うかい？」
マーリエ「……わかんない。」
サーシャ「ソフィは、マーリエのことをどういうの？」
マーリエ『『大人なんだから』ともいうし、『子どものくせに』ともいう。あの人は『大人』なのに、自分の都合のいいように私を『大人』にしたり『子ども』にしたりして、『子ども』みたい。だから、気持ち悪い。嫌い。」
サーシャ「……。」
マーリエ「でも私も、『もう大人だから』と思ったり、『まだ子どもなんだし』とも思ったりする。」
サーシャ「……。」
マーリエ「気持ち悪いの。大人でも、子どもでも、どっちでもあって、どっちでもない自分が、気持ち悪いの。どっちとでも言う周りが、気持ち悪いの。」
サーシャ「……。」
マーリエ「……だから、いつもイライラしてるのかも。」
サーシャ「マーリエは、『子ども』と『大人』、どっちでいたいの。」
マーリエ『『子ども』ではいたくないけど、『大人』みたいに、あの人みたいになりたくない。……どっちも嫌い。」
サーシャ「なんで？」
マーリエ「気持ち悪い。」
サーシャ「あえて言うなら？」
マーリエ「……。」
サーシャ「カエルとオタマジャクシ。」
マーリエ「え？」
サーシャ「オタマジャクシは、いつかカエルになる。」
マーリエ「え？……うん。」
人形い「どうやって？」
人形ろ「どうっやて？」
人形は「卵が？」
人形に「オタマジャクシに。」
人形い「それで？」
人形ろ「足が生える。」
人形は「手が生える」
人形に「尻尾がとれて。」
マーリエ「カエルになる。」
サーシャ「足が生えたらカエルかい？」
人形ろ「え？」
サーシャ「手が生えたら、カエルかい？」

人形は「え？」
サーシャ「尻尾がとれたらカエルかい？」
人形に「え？」
人形い「どこからだい？」
人形ろ「わからない。」
人形は「わからない。」
人形に「わからない。」
サーシャ「カエルは、自分の子どもがオタマジャクシであることを知っているかい？自分がオタマジャクシだったことを覚えているかい？」
マーリエ「分かるわけない。」
サーシャ「まさに、カエルのみぞ知る世界だ。」
マーリエ「でも、カエル達も、自分ではわからないのかも。」

人形達が『カエルの歌』を歌い始める。

【七】歌うのは、カエルか？

サーシャ「おっと、もうこんな時間か。昼ごはんの用意をしなくちゃ……と。掃除、手伝ってくれる？」
マーリエ「えー、これを？」
サーシャ「埃っぽい中で食べたくないだろう？」
マーリエ「はーい。」

二人、掃除を始める。
サーシャ、箒と塵取りをマーリエに渡す。

サーシャ「カエルの歌。歌うのは、カエルだけかな？」
マーリエ「ん？」
サーシャ「自分はね、オタマジャクシだって、歌っていいと思うんだ。足が生えてたって、腕が生えてたって、尻尾が付いてたって、歌っていいと思うんだ。オタマジャクシの歌は、カエルの歌とはちょっと違うかもしれないけれど、歌ってていいと思うんだ。」
マーリエ「みんな、同じ生き物だから？」
サーシャ「少し堅苦しいけど、そんな感じ。マーリエももっと歌っていいんじゃないかい？マーリエの思う、理想のカエルの歌を。それは、周りが思うマーリエとは、違うかもしれない。でも、マーリエが歌うことはマーリエ自身しか、決めることはできない。自分の好きな歌は、自分にしか分からない。自分の思う理想の自分を見つめて、一心不乱に歌ったらいい。」
マーリエ「うーん……自分の好きなように振る舞えってこと？」
サーシャ「ああ。子供らしくとか、大人らしくとか、そんなことはどうだっていいんだよ。結局、一人ひとり、思い描くものはみんな違うんだもん。マーリエが、良いって思えることを

すればいいと思うよ。」
マーリエ「分かるような、分からないような？」
サーシャ「ちゅうぶらりんだね。」
マーリエ「ちゅうぶらりん。」

人形達とサーシャとマーリエ、口々に「ちゅうぶらりん。」とつぶやく。

（終わり）

【著作権について】
・著作権はすべて作者である梅井ゆえに帰属します。
・ダウンロードした作品は無料で閲覧いただけます。
・非公開で突破的に使用される場合のみ、連絡不要かつ無料でお使いいただけます。
・右記以外で本作を使用されたい場合は、使用料の有無にかかわらず梅井ゆえまでご連絡ください。（Mail:umeiyue54@gmail.com）
・使用方法・料金等の詳細は、梅井ゆえウェブサイト（https://script.umeiyue.website）のガイドラインをご覧ください。